

〈論文〉

プラトンの『パイドン』における魂の不滅・不死性と そのものの認識についての考察

—— 知識人の人間観ならびに社会観（7） ——

Studies on Immortality of Soul and Nature of Thing in Platon's 『Φαίδων』

—— High-Brow Views with Human Nature and Social Relationship (7) ——

久保田 義 弘

はじめに

プラトン（Πλάτων, Plátōn）（前427年-前347年）は、イデア論や想起説を提唱した哲学者、ソクラテスに対話者の一人にして数多くの対話編を著した思想家・文筆家（詩人）、講師料などの金銭を得て青年に人生の処世術（生きる技術）を講義したソフィストの教義に対する反論あるいは対抗した問答術に卓越した思想家、政治家になる希望あるいは夢を抱いて政治・国家について考察した国家論者、またソクラテスを心から信頼し敬愛したソクラテスの愛弟子であった。

本稿では、真の実在を探究した¹プラトンの『パイドン —魂の不死について—』を通して、彼の、ことの本質（ものの本性）を見極める認識論（イデア説）の広がりについて考察する。すなわち、プラトンは、『饗宴』で個別・具体的な美しいものから美そのもの（すなわち、美の本質、あるいは美の本質）を認識する認識論を提示したが、本稿では、その認識論が拡張され得ることを明らかにする。併せて、この認識論において、何故魂の不滅・不死性が前提されるのかについても考察する。

対話編『パイドン —魂の不死について—』は、プラトンによる35の対話編の中の一つであるが、彼の中期始めのころの対話編であると言われている。この対話編は、『国家』、『饗宴』あるいは『パイドロス』と同様に中期の対話編であるが、時期的にはこれらの対話編より早い時期に書かれたと思われる。この対話編は、『饗宴』と同様に、プラトンの認識論である‘イデア論’の確立直前の作であると考えている。

¹ 納富信留著『プラトンとの哲学—対話編をよむ—』序章（7ページ5から6行目）に、「プラトンは、ソクラテスの精神を受け継ぎ、対話編を哲学の基本としていたのです。それを整備した問答法こそが、真の実在を探求する方法だと考えます」とある。

本稿で取り上げる対話編は、パイドン（あるいはファイドン）というソクラテスの弟子によって、ソクラテスの処刑日にソクラテス自身の話しを思い出し、ソクラテスを慕ってアテナイに来ていた、ピタゴラス派のシミアスとケベス²に語ったものであった。エリスの人であったパイドンは、ソクラテスが毒薬によって処刑された日に、ペロポネス半島北東部に位置するプレイウスというところで、ソクラテスの最後の言葉を物語った。

なお、本稿の目次の構成は、以下のようである。第1節では、哲学者ソクラテスが死を恐れることなく、喜んで受け入れているのは何故なのかというプラトン自身の疑問を解こうとしている。積極的に死を受け入れた人が哲学者であると理解して進める。第2節では、魂の不滅性・不死性という特性を幾つな方法で論証する。この不滅性・不死性を輪廻説、想起説ならびにイデア説の3つの方法で立証しようとしている。第3節では、魂が棲むところの大地の構造と各魂の生活が示される。そこは神話の世界である。プラトンは、ソクラテスを「われわれ人間は神々の持物の一つなのだ」³と信じる人物の一人として物語っている。なお、本稿の目次構成は次のようになっている。

第1節 哲学者と死 1.1 哲学者の姿勢 1.2 哲学者と自殺 1.3 真の哲学者：ソクラテス

第2節 魂とその不滅・不死性 2.1 魂 2.2 魂の特性あるいは属性 2.3 理性（知性）原因説への失望 2.4 魂の不滅性 2.5 魂の不滅性への疑問を廻る説明 2.6 魂の不滅性あるいは不死性への疑問に対する反論 2.7 魂の不死性・不滅性 2.8 魂の不死性と魂の多様性

第3節 不死の魂の住み家 3.1 裁かれる魂 3.2 宇宙と大地の形 3.3 翼をつけた旅人のみた大地：真の大地 3.4 大地の内部構造 3.5 魂の住み家 である。

さらに、本稿と経済学の方法論の関係を示しておこう。経済学では、消費主体の家計（部門）が無限に生きると想定して理論を組み立てる。この想定は、プラトンの魂が不滅・不死であると仮定することに類似している。消費者の肉体は有限であるが、その魂は無限であると経済学でも仮定しているのであろうか。それとも、消費者を物質として扱っているかもしれない。例えば、最適成長論において家計が無限期間（時間）にわたってその消費水準の最適経路を選択する制御問題を考察するとき、消費者が無限期間を生きるかのように想定する。

² シミアスもケベスもピタゴラス派の哲学者・数学者ピロラオス（Φιλόλαος；Philolaos）（前470年頃生-前385年没）の弟子であった。プラトン著（田中美知太郎・池田美恵共訳）『クリトーン』45B（75ページ13から14行目）に、「ちょうどそのために、十分のお金を用意して来た者が、一人いるのだ。テーバイから来たシミアスがそれだ。またケベスにも、その用意があるし、ほかにもそういう者が、とてもたくさんいるのだ」とある。ここでのお金とは、ソクラテスを脱獄させ逃亡させるための資金のことである。彼ら二人は、テーバイの裕福な家庭の青年であったと思われる。

³ 上掲書『パイドン』62B（114ページ14から15行目）。

この制御問題の制約には、時間と共に変化する資本水準状態が与えられ、境界条件（たとえば初期の資本ストック水準）が与えられ、消費者の効用水準を現在に割り引く正の（非負の）因子が与えられる必要がある。さらに、消費者の効用関数ならびに状態変数の動きを決める生産関数に行儀のよい性質⁴を与えて、消費者の消費水準の最適経路を算出する⁵。経済学にて無限期間を想定するときには、消費者は肉体的には朽ちるかも知れないが、無限に生きる精神（魂）によって自身の最適消費経路を決めると経済学では消費者の動学問題を解いていると考えられる。人間の肉体は朽ちるが、理性の宿る魂（靈魂）は不死・不滅であるとして無限問題に解を与えると考えられる。この意味でもプラトンの魂の不滅性あるいは不死性の証明は経済学を学び教える研究者にも必須の課題であると思われる。

第1節 哲学者と死

1.1 哲学者の姿勢

パイドン⁶たちは、処刑の日のソクラテスに哲学者としての特性・素質を認める。それでは、実際、哲学者とはどのような人物なのであろうか。プラトンは、真実（真の实在）とはいかなるものかを知り、「自分の書いた事柄について訊問されたときに、書いたものをたすけてやることができ、そして、書かれたものは価値の少なくないものだということを、みずから実際に語る言葉そのものによって証明するだけの力をもっている」⁷人を知者、あるいは「愛知者」（哲学者）であると述べている。プラトンは、書かれた言葉よりも語る（問答する）ことの重要性を実践した哲学する者であった。プラトンは、「哲学者とは、つねに恒常不変のあり方を保つものに触れることのできる人々のことであり、他方、そうすることができずに、さまざまに流転する雑多な事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない」⁸とその特性・素質について述べている。すなわち、プラトンは、哲学者たちの自然的素質として、「生成と消滅によって動揺することなくつねに確固としてあるところの、かの真実在を開示してくれるよ

⁴ 効用関数は、稠密な凸集合（コンパクトな凸集合）の部分集合であると仮定する。さらに、効用関数は時間と共に変化しない。これは、プラトンと同様に、不変性・不滅性の仮定である。また、生産関数については、生産要素の限界生産性が非負であり、その凸結合の部分集合に投入領域が含まれると仮定される。これは、生産関数のヘシアン行列は非負とする仮定である。つまり、生産要素の限界生産性を非負にする生産要素の凸集合が存在することを仮定する。生産関数も時間と共に変化しない不変性・不死性を仮定する。

⁵ 経済学では、例えば、最適制御理論としてもハミルトニアン関数を用いて計算する。

⁶ ディオゲネス・ラエルティオス著（加来彰俊訳）『ギリシア哲学者列伝（上）』第2巻第9章（パイドン）（206ページ2から5行目）に、「パイドンはエリスの人で、よき家柄の出であったが、祖国の陥落とともに囚われの身となり、いかがわしい家（娼家）に無理やり預けられた」、また「ソクラテスがアルキビアデスカクリトンかのどちらかに頼んで、身代金を払ってもらって彼を自由の身にしてやった」とある。

⁷ プラトン著（久保勉訳）『パイドロス』278C（144ページ5から7行目）。

⁸ プラトン著（藤原令夫訳）『国家（下）』484B（18ページ12から14行目）。

うな学問に対して、つねに積極的な情熱をもつ⁹ことを哲学する人に求めている。哲学者は、生成消滅するもの、流転するものではなく、恒常不変なものに触れることが出来る人であるとプラトンは考えている。さらにその上で、哲学者達は、偽りがなく、すなわち虚偽を憎み、真実を愛することを求めている。人間の欲望は、魂がそれ自身だけで楽しく快樂にかかわることになるが、だが「肉体的な快樂については、その流れは涸れることになるであろう」¹⁰とも述べている。哲学者は、肉体的な快樂にではなく、魂自身の快樂に身を置くことをプラトンは求めている。すなわち、哲学する人は「節度ある人間であって、決して金銭を愛し求める人間ではないだろう。なぜなら、余人はいざ知らずそのような人だけは、人々が熱心にお金を求め散財することによって獲得しようと願うさまざまなものに対して、まったく関心がないはずだから」¹¹ともプラトンは言っている。プラトンは、哲学者の素質として、

- (1) 万有の全体を一神的なもの人間的なものも一つねに憧れ求めよとする程の魂、よってけちな根性（狭量な精神）とは相容れない精神
- (2) 死を恐ろしいものとは考えない
- (3) 公正にして穏和な魂¹²
- (4) 記憶力のよい魂¹³
- (5) 生まれつき度を守り優雅さをそなえた精神¹⁴

などを取り上げ、哲学とは「生来の自然的素質において記憶力がよく、ものわかりがよく、度量が大きく、優雅で、真理と正義と勇気と節制とを愛し、それらと同族の者でないかぎり、けっしてじゅうぶんに修めることのできないような仕事なのだ」¹⁵とプラトンは整理している。

1.2 哲学者と自殺

殆どの人にとっては、「人間にとって生きるより死ぬ方がよいということ」¹⁶は不思議であ

⁹ 前掲書『国家（下）』485B（21ページ12から14行目）。

¹⁰ 前掲書『国家（下）』485E（23ページ14から15ページ）。人の様々な欲望が、「ある一つの方向にはげしく向かっていくときには、それ以外の方向への欲望は勢いが弱まるもの」とプラトンは想定している（前掲書『国家（下）』485E（23ページ3から5行目））。魂が学ぶことやそれに類する事柄へ向かって流れるときには、肉体的な快樂への流れは勢いが弱まる。

¹¹ 前掲書『国家（下）』485E（24ページ2から5行目）。

¹² これは、交わりがたく粗暴な魂とは相容れない。

¹³ これは、忘れっぽい魂とは相容れない。「忘れっぽい魂は、哲学をする資格をじゅうぶんにもった者のうちに数へ入れないことにしよう」と言う（掲書『国家（下）』486D（26ページ14から15行目））。

¹⁴ 「そのような精神は、もって生まれた素質におのずから促されて、それぞれの真実在の実相へと容易に導かれていこう」と言う（前掲書『国家（下）』486E（27ページ9から10行目））。

¹⁵ 前掲書『国家（下）』487A（28ページ2から5行目）。

り、容易に受け入れることができないであろう。ソクラテスの対話者の一人であるケベスは、哲学者が自ら命を絶つことをよしとすることに疑問を抱いて、「哲学者は平気で死んでゆこうとするものだ」¹⁷と語り、一方で「神さまが何か逃れられない運命を与えたもうまでは、自殺してはいけない」¹⁸と語るソクラテスに、その理由を問うている。確かに、ケベスにとっては、人間が神の持ち物の一つであり、神によって護られているなら、自ら何の悲しみをも抱かずに、その保護者である神を離れ、あの世にゆくのは不合理であると思われたのであろう。このように考えて、彼は「愚かな人だけが」¹⁹主人である神から逃げ出すのであって、「愚かにも逃げ出したりするのでしょうか」²⁰とソクラテスに言い寄っている。この哲学者が自らの命を断つことを厭わない姿勢には、もう一人の対話者であったシミアスも納得が出来ずにいたのであった。シミアスもまた、「よき支配者だとあなたがご自分で認めていらっしゃる神々からも、離れて行かれるのに、そんなに平然としていらっしゃる」²¹とソクラテスの真意に疑問を抱いていた。哲学者が自らの命を絶つことについて、二人の対話者の疑問にソクラテスは弁明する形で答えている。その前提としてソクラテスは、あの世について、次のような前提を置いている：

- (1) この世の神々とは別の賢明で善良な神々が棲む
- (2) この世の人々よりも優れた、すでに亡き人々のもとへゆく

とソクラテスは想定している。ソクラテスは、よきひとびとのもとへ行くのだという希望を持っていたが故に、ソクラテスはあの世に希望を持っていたのである。ソクラテスは、何故哲学者が死を恐れないのかについて語り、死に臨んで、哲学者が死を恐れることはむしろ不自然であると語る。他の人々には理解できないであろうが、「真の哲学にたずさわる人々は、ただひたすら死ぬこと、死を全うすることをめざしている」²²と言う。「真の哲学者たるものが、いかなる意味で死人も同然なのか、いかなる意味で死ぬのが適当なのか、またいかなる死が彼らにふさわしいのか」²³についてソクラテスは二人のピタゴラス派の青年(ケベスとシミアス)に説明する。

ソクラテスは、その二人に、はじめに死とは何かについて語り説いている。死とは、「魂の肉体からの離脱」²⁴であり、死んでしまうということは、「肉体が魂から離れて肉体だけにな

¹⁶ プラトン著(田中美知太郎・池田美恵共訳)『パイドーン』62A(114ページ2行目)。

¹⁷ 前掲書『パイドーン』62D(115ページ6行目)。

¹⁸ 前掲書『パイドーン』62C(115ページ3から4行目)。

¹⁹ 前掲書『パイドーン』62E(115ページ11から12行目)。

²⁰ 前掲書『パイドーン』62E(115ページ14行目)。

²¹ 前掲書『パイドーン』63A(116ページ8から9行目)。

²² 前掲書『パイドーン』64A(118ページ9から10行目)。

²³ 前掲書『パイドーン』64B(119ページ3から4行目)。

り、他方魂が肉体から離れて魂だけになること²⁵と死をソクラテスは規定している。ソクラテスは、飲食の快樂、性的快樂、さらに、他人より立派な衣服とか靴を買うこと、その他肉体を必要以上に飾ることを哲学者は軽蔑すると言う。そして、ソクラテスは、真の哲学者の関心は、肉体ではなく、魂にあることを一つの結論として述べている。そして、その二人の青年との間でソクラテスは「哲学者というものとは普通人とは違って、魂を肉体との結びつきからできるだけ解放しようとする」²⁶ことを確認する。だが、世間の人々にとっては、肉体的快樂に全然興味をもたない人間などは死んだのと同然であると、ソクラテス（即ちプラトン）は見ていると理解される。ソクラテスと世間の人々の間には、快樂を置く対象が異なることに注意することが重要である。

1.3 真の哲学者：ソクラテス

知識の獲得において、肉体と魂はどのような関係にあるのであろうか。真の哲学者についてソクラテスはどのように語っているのであろうか。ソクラテスは、「視覚や聴覚は、人間になんらかの真実を教えるのか」²⁷と自問・反問し、「われわれの見聞きすることは何一つ厳密ではない」²⁸と言い、さらに「肉体のもつこの二つの感覚が厳密でも確実でもない」²⁹と看做している。魂が真実（真理）に触れることが出来るのは、ソクラテスによると、それは肉体と一所にではないであろうと言う。魂に苟も真実が明らかになるのは、それは、魂が「思惟することにおいてではないか」³⁰とソクラテスは語り始める。続けて、彼は「思惟が最も見事に働くのは、魂が聴覚、視覚、苦痛、快樂といった肉体的なものにわずらわされることなく、肉体を離れて、できるだけ魂だけになって、肉体との協力も接触も能うかぎりこぼみ、もの真実を追求する」³¹と語る。ソクラテス（すなわちプラトン）は、哲学者の魂が肉体を蔑視し、そこから逃れ、魂が一人になることを考えていると判断される。ものごとを認識するときには、魂によって為されるのであって、肉体的な感覚では不可能であるとプラトンは考えているのであろう。プラトンは、視覚や聴覚などの感覚より理性に信頼を置いて、魂と肉体との分離が可能であると考えている。

この前提のもとで、正しさそのものが在るとして、それをどの様にして認識することがで

²⁴ 前掲書『パイドン』 64C (119 ページ 8 行目)。

²⁵ 前掲書『パイドン』 64C (119 ページ 8 から 9 行目)。

²⁶ 前掲書『パイドン』 65A (120 ページ 9 から 10 行目)。

²⁷ 前掲書『パイドン』 65B (120 ページ 17 から 18 行目)。

²⁸ 前掲書『パイドン』 65B (121 ページ 1 から 2 行目)。

²⁹ 前掲書『パイドン』 65B (121 ページ 2 行目)。

³⁰ 前掲書『パイドン』 65C (121 ページ 9 から 10 行目)。

³¹ 前掲書『パイドン』 65C (121 ページ 12 から 14 行目)。

きるのであろうか。たとえば、視覚あるいはその他知覚を用いて識る・知ることができるであろうか。視覚以外の身体的感覚でとらえることができるであろうか。最も純粋な認識に達するのは如何なる人であろうか。ソクラテスは、そのような人は哲学者であると言う。その人は、出来る限り「思惟そのものだけを用いて」³²、認識しようとしている「それぞれの対象に近づき」³³、「それぞれの対象を純粋にそれ自体として追求しよう」とつとめ³⁴、そして、「視覚を思惟の助けに用いたり、そのほかなんらかの感覚をひっぱりこんで思惟と一緒に用いたりせず、純粋に思惟そのものを用い」³⁵、「目や耳やいわゆる肉体全体については、これらと共にあれば」³⁶、「魂は掻き乱され、真実と知恵とを得ることができないとして、それらからできるだけ離れる者」³⁷であると言う。ソクラテスは、感覚などの肉体的なものは、対象の純粋な認識には、邪魔になる存在であるとしている。肉体は思惟する魂の妨げになるとプラトンは考えているのであろう。

それでも、実際には、人は肉体を持ち、魂が肉体と離れがたく結びついていると思われる。そうすると、人は真実を獲得し得ないことになるのであろうか。つまり、肉体を養うために面倒なことを多数しなければならぬだけでなく、病に倒れると、真実の探求を妨げられることになる。ソクラテスは「われわれは肉体があるために、何ごとにつけ、瞬時も考えることができないというのは、正に本当」³⁸であると考えている。戦争も内乱も戦いも、みんな肉体とその欲望が起すものと、ソクラテスは語る³⁹。そしてソクラテスは、「肉体が至るところで邪魔をして、われわれの心を掻き乱し、混乱させ、驚かせ、その結果われわれは肉体のおかげで真実をみることができなくなる」⁴⁰と結んでいる。ソクラテスと二人のピタゴラス派の青年は、「何かを純粋にみようとするなら、肉体から離れて、魂そのものによって、物そのものを見なければならぬ」ということは、われわれには確かに明白な事実⁴¹と同意し、そして、その時にこそ「知恵が、われわれのものになり得る」⁴²と確信した。このことが可能にな

³² 前掲書『パイドーン』65E(122ページ16行目)。

³³ 前掲書『パイドーン』65E(122ページ16行目)。

³⁴ 前掲書『パイドーン』66A(122ページ18行目)。

³⁵ 前掲書『パイドーン』66A(122ページ16から18行目)。

³⁶ 前掲書『パイドーン』66A(122ページ18から123ページ1行目)。

³⁷ 前掲書『パイドーン』66A(123ページ1から2行目)。

³⁸ 前掲書『パイドーン』66C(123ページ13から14行目)。

³⁹ 前掲書『パイドーン』66D(123ページ16行目)に、「奴隷のように肉体に奉仕しなければならない」とソクラテスは歎いている。そのために、哲学に励む暇もない。ギリシヤ時代には、食物等の生産は奴隷労働に大きく依存して、また家庭内の雑事は奴隷を使役してなされていた。プラトンは、肉体的活動を奴隷の為すべきものという慣習によってこのことを語っているのかも知れない。

⁴⁰ 前掲書『パイドーン』66D(124ページ1から3行目)。

⁴¹ 前掲書『パイドーン』66E(124ページ4から5行目)。

⁴² 前掲書『パイドーン』66E(124ページ6から7行目)。

るのは、死んでからであって、生きているうちには不可能であるとの結論に至った。というのは、「死んで初めて、魂は肉体から離れ純粋に魂だけになる」⁴³ことが可能であると思われるからである。

それでは、生きている間、知恵（知識）に近づけないのであろうか、ソクラテスは、「できるだけ肉体と交わったり共同したりすることを避け、肉体の本性に染まず清浄であるようにつとめ、神ご自身がわれわれを解き放してくださるのを待つこと」⁴⁴であると言う。よって、ソクラテスは、死を恐れずに、むしろ「楽しい希望にもえて、いま僕に命ぜられているこの旅に出かけるのだ。しかもこれは僕だけでなく、心が浄化され準備ができていると思う人は誰でもそうなのだ」⁴⁵と語ることができたのであろう。真の哲学者の仕事とは、「魂の肉体からの解放」⁴⁶として説いている。だから、「真の哲学者が死ぬことを心がけているものであり、彼らは何びとよりも死を恐れないものであるということは本当なのだ」⁴⁷とソクラテスは語る。ソクラテスは、あの世に行けば、「生涯恋してきたものである知恵が手に入り、争いつけてきた相手とは一緒にいることから解放される希望がある」⁴⁸と語り、そこへ行くことを喜んでいるのである。

死に臨んで嘆く者を見たなら、その者は知を愛する人ではなくて肉体を愛するものであることは間違いなく、そして、その者は「おそらく金銭を愛するものであり、名誉を愛するものでもあるであろう」⁴⁹とプラトンも考えていたのは間違いのない。毒殺刑で処刑されるソクラテスにプラトンは哲学者としての自然的な素質を見ていたのであろう。

第2節 魂とその不滅・不死性

2.1 魂

プラトンによると、魂とは、われわれの理性（思慮）に当たる部分（理知的部分）、われわれの怒りや欲びなどの感情に当たる部分（気概の部分）、そして食欲や性欲などの欲望に当たる部分（欲望的部分）から構成されると説明している。これは、魂三分説として知られる。プラトンの『国家』⁵⁰において、この魂を構成する3つの部分についての関係が説かれている。「魂がそれによって、^{ことわり}理を知るところのものは、魂のなかの〈理知的部分〉と呼ばれるべき

⁴³ 前掲書『パイドン』67A（124ページ10行目）。

⁴⁴ 前掲書『パイドン』67B（124ページ13から15行目）。

⁴⁵ 前掲書『パイドン』67C（125ページ6から8行目）。

⁴⁶ 前掲書『パイドン』67D（125ページ18から126ページ1行目）。

⁴⁷ 前掲書『パイドン』67E（126ページ6から7行目）。

⁴⁸ 前掲書『パイドン』68A（126ページ10から11行目）。

⁴⁹ 前掲書『パイドン』68C（127ページ4から5行目）。

⁵⁰ プラトン著（藤沢令夫訳）『国家（上）』440Eから441B（358ページ16から359ページ16行目）参照。

であり、他方、魂がそれによって恋し、飢え、渇き、その他もろもろの欲望を感じて興奮するところのものは、魂の非理知的な〈欲望的部分〉であり、さまざまの充足と快楽の親しい仲間であると呼ばれるのがふさわしい⁵¹とプラトンは説明している。魂の第三の要素としての気概については、プラトンは「気概、すなわち、われわれがそれによって憤慨するところのもの」⁵²として規定している。欲望と理性（理知）と気概の三者の間の関係について、プラトンは、「欲望が理知に反して人を強制するとき、その人は自分自身を罵り、自分の内にあって強制しているものに対して憤慨し、そして、あたかも二つの党派が抗争している場合におけるように、そのような人の〈気概〉は、〈理性〉の味方となつて戦うのではないか」⁵³と説明している。プラトンの魂は三分割されて構成されるが、魂の構成で三分割に対応させているところにプラトンの特徴がある。〈欲望的部分〉は金儲けを業とするもの、統治者を補助する部分が〈気概の部分〉で、〈理知的部分〉の補助者あり、そして政策を審議する部分が〈理知的部分〉に対応している。

プラトンは、魂を非物質的なものと捉えていると思われる。その魂は、それ自体で存在し、運動すると捉えている。肉体から分離した魂が、運動し、他の肉体に再び宿ることが可能であるとプラトンは考えている。この魂の運動をつかさどる実体は何であろうか。それとも魂自体にそのエネルギーが存在するのであろうか。プラトンは、魂自体に運動する能力が備わっていると考えている。ゆえに、プラトンは、魂の働きによって、肉体から独立して、人間が思考し、欲望を示すことになる。人間が視覚や聴覚などの感覚を通じて感じている（見ている）ものは、実体ではなく、影を捉えているに過ぎないとプラトンは説くことができたのであろう。

プラトンは、理知的部分が感覚よりあるいは感情よりも、人間の認識を支配していると見ている。プラトンは、魂を非物質的なものとしているが、エピクロス（Επίκουρος, Epikouros）（前341年生-前270年没）は、感覚と感情によって捉えることによって、「靈魂がつぎのような物質であるということを綜観すべきである、すなわち靈魂は微細な部分から成り、全組織にあまねく分散しており、熱を或る割合で混在している風に最もよく似ていて、或る点では風に、或る点では熱に似ているところの物体である」⁵⁴と説明している。ここで、微細な部分とは、アトム（原子）のことであり、全組織とは人間の身体全体である。エピクロスは、靈魂を熱を帯びた風のようなものであると捉えている。この見解は、聖書の靈（聖靈）のとらえ方に似ている⁵⁵。また、魂（靈魂）には「組織体の残りの部分（肉体）とも共感して働くこと

⁵¹ 上掲書『国家（上）』439D（355ページ7から11行目）。

⁵² 上掲書『国家（上）』439E（355ページ16行目）。

⁵³ 上掲書『国家（上）』440B（357ページ2から5行目）

⁵⁴ 出 隆・岩崎允胤共訳『エピクロス—教説と手紙—』ヘロドトス宛の手紙（63（28ページ2から5行目））。

ろの特定の部分がある』⁵⁶と説明している。この特定の部分とはどこなのか、あるいは何なのかについてエピクロスは述べていない。またエピクロスは、靈魂と肉体の関係について、「もし靈魂が組織体の残りの部分（肉体）によって何らかの仕方で囲み保たれているのでなかったならば、靈魂は感覚をもつことさえできなかったであろう。そして、靈魂を囲み保つこの残りの部分は、靈魂にたいしてこうした感覚の原因たるの条件を供していることによって、この部分それ自らまた、靈魂の側から生じるところの感覚という偶発性に関与するわけである』⁵⁷と説明している。エピクロスは、魂は肉体を伴ってはじめて感覚を得ると言っている。確かに、エピクロスが語るように、魂（靈魂）が肉体から離れるときには、肉体は感覚をもつことはなく⁵⁸、肉体自体では感覺的能力を所有することはないのかも知れない。肉体は魂に感覺する条件を提供しているに過ぎないのかも知れない。エピクロスは、「靈魂は、それを構成する原子の運動によってそれ自らの内部に実現された能力のゆえに、それ自らで直接に、感覚という偶発性を生じ、肉体との接触と対応的性質によって、先に述べたように、肉体にもこの偶発性を分かち与えた』⁵⁹と説明する。エピクロスは、魂は原子から成り、その運動を原子群の運動によって説明している。感覺の原因が靈魂であり、肉体ではないとエピクロスは意味している。

エピクロスの考えに従うならば、魂（靈魂）が原子群からなることになるので、そのときには、魂の不滅性や不死性を立証できるのであろうか。肉体が朽ちる（滅びる）⁶⁰ときに、魂も共に滅亡するのではなからうか⁶¹。プラトンは、魂の不滅性・不死性の立証のために、魂が

⁵⁵ たとえば『ヨハネによる福音書』第3章8節に、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」とある。

⁵⁶ 前掲書『エピクロス—教説と手紙—』ヘロドトス宛の手紙（63（28ページ6から7行目））。エピクロスは、靈魂を感覺の主要な原因であると捉えている。感覺（視覚や聴覚など）が肉体の一部ではなく、魂（靈魂）によって支配されていると見ている点ではプラトンとは違っている。プラトンは、肉体が感覺を支配すると見ている。

⁵⁷ 前掲書『エピクロス—教説と手紙—』ヘロドトス宛の手紙（64（28ページ12から15行目））。

⁵⁸ 前掲書『エピクロス—教説と手紙—』ヘロドトス宛（65（29ページ12から14行目））では、「全組織体が分解されれば、靈魂は分散し、もはや決して、以前と同じ諸能力をもちあはしないし、また、運動もしない。したがってまた、感覺をも所有しないのである」と説明している。

⁵⁹ 前掲書『エピクロス—教説と手紙—』ヘロドトス宛の手紙（64（29ページ3から6行目））。この引用で、感覺という偶発性とは、感覺という附帯能力という意味と解する。

⁶⁰ 前掲書『エピクロス—教説と手紙—』ヘロドトス宛の手紙（65（29ページ6から10行目））において、エピクロスは「靈魂は、肉体のうちにあるかぎり、肉体の或る他の部分が分離しても、決して感覺を失わないであろう。いやそればかりか、靈魂のいずれかの部分が亡びても、つまり、靈魂の或る部分を囲み保つ肉体が、全部にせよ一部にせよ、その部分から離れたために、それといっしょに、靈魂のその部分が亡びても、残った靈魂は、それがなおも存続しているかぎり、やはり感覺をもつであろう」と言っている。エピクロスは、残った靈魂と言っているが、靈魂（魂）は分解されるとみている。というのは、靈魂が原子群から構成されるので、分解されうる。分解されたとしても不思議ではない。

非物質的であると想定せざるを得なかったのかも知れない。この点はエピクロスが原子(物質的)であるという想定とは異なっている。だが、エピクロスは神の存在を認めているので、彼は無神論者ではない。

2.2 魂の特性あるいは属性

プラトンは、魂の属性として、第一に、非合成物であること、第二には、不可視的なものであること、第三には、不滅・不死性であることを想定している。以下では、魂のこれらの特性をプラトンはソクラテスの語りによって説明している。ソクラテス(すなわちプラトン)の説明を見てみよう。

ソクラテスは、常に同一で変化しないものが非合成物で、変化して瞬時も同一でないものが合成物である⁶²と規定する。非合成物は分解することが出来ないという性質をもつ。「ものそのもの」あるいは真実在は、常に同一であるから、常に単一の形状を保ち、それ自身だけで存在する。よって、真実在は、「常に変化せず、同一の状態にとどまって、どのような時にも、どのような点でも、どのような仕方でも、なんらの変化をも、うけることがない」⁶³とソクラテスは語る。それに対して、美しい少年、美しい馬、美しい上着、その他なんでも、そのような類の事物は、常に変化せず、同一の状態にとどまって、どのような時にも、どのような点でも、どのような仕方でも、何らの変化をも、うけることがないのであろうか。真実在とは逆に、それらのものは同一の状態を保つことはない。これらの事物は、決して不変ではない。そういう事物を「手でさわったり目で見たりそのほかの感覚を用いて知覚したりすることができる」⁶⁴ので、それらは可視的なものである。それに対して、「不変なものの方は、思惟の働きによって以外に、捉えられない」⁶⁵ので、不変なものは感覚で捉えることが出来ない。すなわち、これらのものは、「不可視的であって、目でみることができない」⁶⁶と説明する。不変なものは不可視的なものである。

即ち、存在するものは、可視的なものと不可視的なものの二種類であるが、可視的なものは常に同一ではないが、不可視的なものは常に同一であるという属性をもつとプラトンは認

⁶¹ 前掲書『エピクロス—教説と手紙—』ヘロドトス宛の手紙(65(29ページ10から12行目))において、エピクロスは「組織体の残りの部分(肉体)が、全体的にしる部分的にしる、存続していても、靈魂の本性を生むのに必要なだけの原子の数が、たとえどれほどわずかにせよ、それから分離すれば、肉体はもはや感覚をもたない」と説明している。

⁶² 前掲書『パイドーン』78C(150ページ17から151ページ3行目)参照。

⁶³ 前掲書『パイドーン』78D(151ページ10から12行目)。

⁶⁴ 前掲書『パイドーン』79A(152ページ3から4行目)。

⁶⁵ 前掲書『パイドーン』79A(152ページ4行目)。

⁶⁶ 前掲書『パイドーン』79A(152ページ5行目)。

めている。この観点から肉体と魂についての違いを説明する。肉体は明らかに可視的なものである。それでは、魂は可視的であろうか。否、魂は肉体よりも「いっそう不可視的なものに似ており、肉体のほうは可視的なものに似ている」⁶⁷とソクラテスは説く。魂は肉体とともにあるときには、「肉体によって、瞬時も同一でない事物のほうへひっぱられ、そして魂自身さまよい、掻き乱され、まるで酔ったようにふらふらする」⁶⁸とソクラテスは説明する。人は、視覚、聴覚、その他の感覚を通して、考察する場合には、魂は肉体によって掻き乱される。だが、魂がそれ自身のみで何かを考察するときには、「魂はあの、純粋で永遠で不死で不変な存在へとおもむき、そしてそのような存在と同族であるがゆえに、常にそれと共にあるのではないか」⁶⁹とソクラテスは説明する。その時には、「魂はもはやさまようことをやめ、あの実在のそばにあって、常に同一にして不変な状態を保つのではなか」⁷⁰と説明する。

ソクラテスは魂について、魂は、肉体よりも、不変なものに似ているという結論に至っている。何故、この結論に至り得るのであろうか。それに至るためには、ソクラテスには、世間の人を超越した思想的特質があったと思われる。ソクラテスは、「魂と肉体とが一緒にいるとき、自然は、後者に対しては、隷属し支配されることを命じ、前者に対しては、支配し主人たることを命じている」⁷¹と説明している。

ソクラテスは、魂が肉体とかわることによって、またそのかわり方によって、その純粋な形を歪めると考えている。ソクラテスとピタゴラス派の二人の青年との間では、「神的で、不死で、叡知的で、単一の形をもち、分解することなく、常に不変で、自己同一であるもの、そのような種族のものにこそ、魂は最もよく似ており、他方、人間的で、死すべきで、種々の形をとり、叡知的でなく、分解しやすく、決して自己同一でないもの、そのようなものにこそ、肉体は最もよく似ている」⁷²と同意し結論に至った。プラトンによると、肉体は死すべきものに似ているが、魂は神的なものに似ている。このことは、肉体はにわかに分解され消えてしまうが、魂は分解しないことを示している。

プラトンは魂を非物質的なものとみているのであろうか、それとも物質的なものとしてみているのであろうか。魂が不可視的なものであると言っているときに、プラトンは魂が非物質的であると暗黙に想定している。非物質的な魂を人はどのように捉えているのであろう

⁶⁷ 前掲書『パイドン』 79B (153 ページ 6 から 7 行目)。

⁶⁸ 前掲書『パイドン』 79D (153 ページ 11 から 13 行目)。

⁶⁹ 前掲書『パイドン』 79D (153 ページ 15 から 17 行目)。

⁷⁰ 前掲書『パイドン』 79D (153 ページ 18 から 154 ページ 1 行目)。

⁷¹ 前掲書『パイドン』 80A (154 ページ 11 から 12 行目)。ソクラテスは、神的なものが支配し、死すべきものが支配され隷属することに適していると仮想している。そして、魂は神的なものに、肉体は死すべきものに似ていると看做している（前掲書『パイドン』 80A (154 ページ 18 行目) 参照）。

⁷² 前掲書『パイドン』 80B (155 ページ 2 から 5 行目)。

か。魂を構成する理性、欲望、そして気概のそれぞれが非物質的であるとき、その実在とは感覚では捉えることは出来ないのであるから、魂を明瞭に把握することが可能なのであろうか。

2.3 理性（知性）原因説への失望

ソクラテスは、自然界にあるものが生成し、消滅し、存在することについて、その原因を探求することを模索し、アナクサゴラスの書物に、ある人が「万物を秩序づけ万物の原因となるものは知性であるという言葉を読んでくれるのを聞いて」⁷³、ソクラテスはアナクサゴラス (Ἀναξαγόρας, Anaxagoras)⁷⁴ (前500年頃生-前428年頃没) に心が引かれた。ソクラテスは、その書物では、知性（理性）が最善である仕方でも万物を秩序づけ、個々の事物を位置づけていると説明されるものと考えた故に、個々のものが生成し、消滅し、存在する原因を発見できるとソクラテスは期待した。ソクラテスは、その書物では、まず、大地が平らか丸いかを教え、次に、「その原因と必然性とを説明してくれるだろうと。何がより善いかということ、また大地にとってこのような形であることがより善かったのだということ、また大地にとってこのような形であることがより善かったのだということ、また大地にとってこのような形であることがより善かったのだということによって」⁷⁵ 何が善であるかを説明すると、また、「地球が宇宙の中心にあるというなら、なぜそれが中心にあることがより善かったのかということも説明してくれるだろう」⁷⁶ と期待した。さらにまた、太陽や月⁷⁷ やその他の天体についても、それらの相対的速度や回帰などの現象について、「それぞれがこのような働きをしたりされたりするのが、なぜより善いことなのかをたずねようと決心した」⁷⁸ のは、アナクサゴラスがこれらの現象を知性によって秩

⁷³ 前掲書『バイドーン』97C (190ページ5行目)。ディオゲネス・ラエルティオス著 (加来彰俊訳) 『ギリシア哲学者列伝 (上)』第2巻第3章アナクサゴラス (122ページ3から6行目) において、アナクサゴラスについて「質料よりも知性(ヌス)を優先させた最初の人である。というのも、彼の書物の冒頭には—その書物は魅力的でしかも威厳のある調子で書かれているのであるが—「あらゆるものがいっしょくたにあった」。そこからヌスがやってきてそれらを秩序づけたのだ、というふうに書かれている」と紹介されている。ここで書物と言っているが、現在、『断片』が伝えられるのみである。

⁷⁴ アリストテレス著 (出 隆訳) 『形而上学 (上)』984b10 から b18 (36ページ5から9行目) において、アナクサゴラスについて「理性を動物のうち存するように自然のうちにも内在するとみて、理性をこの世界のすべての秩序と配列との原因であると言っていた」人として語っている。また、「理性をば宇宙創造の説明のためにただ機械仕掛けの神として用い、物事がどのような原因で必然的にそうあるのかという難問で行き詰まった場合にそれがかつぎだしてくるが、その他の場合には、生成する事物の原因をすべて理性より以外のものに帰している」としてアナクサゴラスについて語っている (上掲書『形而上学 (上)』985a20 (38ページ9から12行目))。

⁷⁵ 前掲書『バイドーン』97E (190ページ18から191ページ2行目)。

⁷⁶ 前掲書『バイドーン』97E (191ページ2から3行目)。

⁷⁷ 上掲書『ギリシア哲学者列伝 (上)』第2巻第3章アナクサゴラス (123ページ13から15行目) において、アナクサゴラスは「太陽は灼熱した金属の塊であり、ペロポネソス半島よりも大きいと語った」、また「月には居住があり、さらに山や谷があるとした」と語った。

序づけると説明しているならば、ソクラテスにとっては「現在のあり方が最善なのだということ以外の原因」⁷⁹を与えるとは考えられなかった。しかし、アナクサゴラスの書物にはソクラテスは失望したのであった。彼は、「知性など全然使ってもいないし、事物を秩序づける原因を知性に帰することもなく、空気とかアイテールとか水とか、そのほか沢山のくだらないものを原因としている」⁸⁰とソクラテスは彼に失望し批判している。彼は、「声とか、空気とか、聴覚とか、そのほか無数のそのようなものを原因だとして、真の原因を語ろうとしない」⁸¹とソクラテスは不満を漏らす。ここでソクラテスが問題にしている真の原因とは、何故ソクラテスが「逃亡するよりも国の命ずる罰に従うことのほうがより正しく立派なこと」⁸²なのか、またアテナイの人たちがソクラテスに有罪の判決を下したのをよしとし、ソクラテス自身も罰をうけるのがより正しいと考えていたのであったが。これには彼の書物は何も答えていなかったのである。その代わりに、ソクラテスが牢獄に座っている原因について、ソクラテスの「肉体が骨と腱からできていて、骨は硬くて関節によってたがいに分れ、腱は伸び縮みして肉や皮膚と一緒に骨をつつみ、この皮膚がこれら全部がばらばらにならないようにまとめている、そこで骨はそのつなぎ目でゆれ動くから、腱を弛めたり縮めたりして、僕はいま肢を曲げることができ、そしてこの原因によって、僕はここにこうして膝を曲げて座っている」⁸³と語っている。このような骨とか腱とかをソクラテスが牢獄に座っている原因とするのは、全く馬鹿げている。ソクラテスが行為をするのは、「最善のものを選んでではないというなら、それは全くもって、いい加減な議論というべきであろう」⁸⁴とソクラテスはアナクサゴラスの原因論に失望し揶揄している。ソクラテスは、「彼らは、万物が現在可能なかぎり最善の状態におかれているようにした力、その力を探求することもせず、それが何か神的な強さを持っていることを考えてもみないで、それよりももっと強力な、もっと不死な、もっとよく万物を統合するアトラスを、いつか発見できるだろうと思こんでいるのだ。善に

⁷⁸ 前掲書『パイドン』98A（191ページ7から8行目）。

⁷⁹ 前掲書『パイドン』98A（191ページ9行目）。

⁸⁰ 前掲書『パイドン』98BからC（191ページ16から18行目）。このアイテール（澄明）は、ヘシオドスの前掲書『神統記』において、カオスの子として挙げられている（『神統記』22ページ10行目）。アナクサゴラスは、事物の原因として多数の原因があると提唱している。その原理とした「ホモイオメレー「同質部分的なもの」は、ほとんどすべて、水や火がそうであったように、すなわちただ結合しあるいは分離するとの意味でのみ生成しあるいは絶滅ものであって、それ以外の意味では生成しもし絶滅もしないで常にそれぞれを自らに止まり存する」とアリストテレスは語る（前掲書『形而上学（上）』984a10からa20（34ページ7から10行目））。

⁸¹ 前掲書『パイドン』98E（192ページ9から10行目）。ここでホモイオメレーとは、各部分が同様であるもの、という意味である。たとえば、水がそのいずれの部分においても同質であるように。

⁸² 前掲書『パイドン』99A（192ページ13行目）。

⁸³ 前掲書『パイドン』98D（192ページ4から7行目）。

⁸⁴ 前掲書『パイドン』99B（193ページ1から3行目）。

して適正な (=統合する) 力こそが真に事物を結びつけ、統合するということを、彼らは考えてもみないのだ」⁸⁵とソクラテスは彼らの認識論を批判する。

ソクラテスは、事物を直接に目でみたり、あるいはそれぞれの感覚でそれに触れたりしようとする、魂を全く盲目にしてしまいはしないかと恐れていた、[「ロゴス (言論) の中に逃れて、そこに事物の真相をさぐるべきだと考えた」⁸⁶。そしてソクラテスの認識方法は、「最も確実だと判断するロゴスを前提にして、その前提と一致すると思われるものを真であるとし、一致しないと思われるものを真でないとする」⁸⁷。ここで前提とは、純粋な美そのもの、善そのもの、大そのもの、そのほかすべてそのようなものがあるという前提であった。これが認められると、このそのもの (美そのもの、善そのもの、大そのもの) つまり、本質が原因であるという結論にソクラテスは至ったのである。プラトンは非物質的なものが事物の原因であるとの結論に至った。

2.4 魂の不滅性

次に、魂の第三の特性である不滅・不死性について考察してみよう。

一般に、常に動いて止まぬものは不死なるものである。プラトンは、「他のものを動かしながらも、また他のものによって動かされるころのものは、動くのを止めることがあり、ひいてはそのとき、生きることをやめる」⁸⁸と言う。故に、他によって動かされるものは不死ではないことになる。だが、「ただ自己自身を動かすもののみが、自己自身をみすてることがないから、いかなるときにもけっして動くのをやめない」⁸⁹とソクラテスは言う。これは、「動の源泉」となり、「始原」⁹⁰となるものである。魂の本質は、「自己自身によって動かされるということこそまさに、魂のもつ本来のあり方であり、その本質を喝破したものだ」⁹¹とソクラテス (すなわちプラトン) は考えている。外の力によって動かされるものは、魂のない無生物であり、内から自己自身の力で動くものは、魂をもっているのである。これは魂の本質から得られる結果である。魂が魂自身を動かしているとき、「魂は必然的に、不生不死のもの」⁹²であるとソクラテスは考えているのである。

『パイドン』において、問題にされているのは魂の不滅性であり、またその不死性である。

⁸⁵ 前掲書『パイドン』99C (193 ページ8 から12 行目)。

⁸⁶ 前掲書『パイドン』99E (194 ページ5 行目)。

⁸⁷ 前掲書『パイドン』100A (194 ページ9 から11 行目)。

⁸⁸ 前掲書『パイドロス』245C (56 ページ7 から8 行目)。

⁸⁹ 前掲書『パイドロス』245D (56 ページ6 から9 行目)。

⁹⁰ 始原とは、生じるということがないものである。また、他方、これは滅びることがないものである。

⁹¹ 前掲書『パイドロス』245E (57 ページ9 から10 行目)。

⁹² 前掲書『パイドロス』246A (57 ページ14 から15 行目)。

最初に、魂の不滅性について考察してみよう。既に説明したように、人が死んだ後には魂は肉体から離れるが、魂は何処に行くのであろうか。それとも肉体とともに消滅するのであろうか。肉体が朽ちた後に、魂が存続し、その力によって知恵（知識）を持ち得るかどうかはプラトンにとっては大きな問題なのである。

『パイドン』のソクラテスは、この問題を「人間が死んでから、魂はハーデースに存在するか、あるいは、存在しないか」を解明して、その次に魂の不滅性を解明しようとしている。ソクラテスは、あの世（冥府；ハーデース）には良き人々が棲むとの希望を持っている。この世に棲んでいた魂があの世界に移り、そこに棲み、この世に再び戻って来る。このことは、魂の帰還が有り得ることを解明することによって示される。「生あるものが死んだものの生まれかわるならば、われわれの魂はあの世に存在するはず」とソクラテスは考えている。というのは、魂がそこ（ハーデース）に存在しないとすれば、再び生まれ来ることはないからである。

ソクラテスは、魂の不滅性を三つの観点から証明している。第一の仮説は、死者の蘇り（輪廻）による証明、第二の仮説は、想起説による証明、第三の仮説は、そのものによる（イデア）による証明、の三点である。これらの仮説を順次説明してみよう。

(A) 第一の仮説は、死者の蘇り（輪廻）説；魂があの世界からこの世へと帰還することによって明らかにされる魂の不滅性、である。

このことは、「一般に、相反するもののあいだでは、一方は必ずそれと反対の他方から生じる」⁹³ことを想定して明らかにされている。「相反する二つのもののあいだには、AからBへと、逆にBからAへとの、二つの生成の過程がある」⁹⁴とソクラテスは想定している。この想定では、「生きているもの」をAとし、「死んでいるもの」をBとし、二つの生成過程は、
(1) 「生きているもの」から「死んでいるもの」が生成され、
(2) 「死んでいるもの」から「生きているもの」が生成される、
ことが提示された。上の(1)では、「死んでいるもの」が「生きているもの」から生成され、(2)では、「生きているもの」が「死んでいるもの」から生成される。後者のことが成立するためには、「死んだ人たちの魂が必ずどこかにあって、そこからふたたび生きかえる」⁹⁵ことが証明される必要がある。

この二つの生成過程は、円環運動をしているとソクラテスは想定する。もしそうでなければ、一方の生成活動しかないならば、生成過程が循環的ではなく直線的になり、すべてのもの

⁹³ 前掲書『パイドン』70E（132ページ5から7行目）。

⁹⁴ 前掲書『パイドン』71B（133ページ6から8行目）。

⁹⁵ 前掲書『パイドン』72A（136ページ3から4行目）。

のが完全に一つのものになる。そして、最後には、生成活動が停止する。すなわち、人はまったく死ぬことがないか、あるいは完全に死人だけになり、後者の場合には人類は死滅することになる。この場合には、上の二つの生成過程が在るとした想定に反する。よって、これは矛盾である⁹⁶。よって、生成過程は円環運動をする⁹⁷ことになる。このことから、ソクラテスと二人のピタゴラス派の青年の間での同意した結論とは、「生きかえるということも、生きていっているものが死んでいるものからうまれるということも、死者の魂が存在するというのも、すべて事実」⁹⁸であった。

(B) 第二の仮説は、想起説による魂の不滅性、である。

この仮説が成立するためには、人間が知識や説明することを自分自身の中に持っていることが必要となる。すなわち、何かを想起するためには、想起しようとする何かを以前に知っていなければならない。人間が死から蘇るときに、何かについての概念をもって生まれるか、あるいは生まれてからその概念を想起する。前者の場合には、人間の感覚がその概念を感じとる前に、人間はその概念を知っていたことになる。その概念を捉える力を持った魂が存在していたことになる。ソクラテスは、「知識を得たうえで、生れかわるたびにいつもそれを忘れないでいるならば、われわれはいつも知識を持った状態で生れ、生涯知りつづけていなければならない。なぜなら知っているとはそういうこと、つまり何かの知識を得てから、それを保持して失わないことにほかならない」⁹⁹と説明する。

しかし、忘却して知識を失うときにはどうなるのであろうか。このときには、「もし生れるまえに知識を得て、生れるときにそれを失ってしまい、後になって感覚を用いて、これらのものについて以前に持っていたあの知識をとりもどす」¹⁰⁰ことができる。そのことが可能になるのは、想起によってである。この世では、知覚するものに似ているものを想起する。知覚の対象には似てはいるが、想起されるものとは違っている。人は、知覚されるものがその

⁹⁶ 前掲書『パイドーン』72B (136 ページ7から9行目) おいて、「もし一方の生成が常に他方の生成に対応して、いわば円環をなすのでなければ、もし生成があるものからその反対のものへと、直線的になされるだけで、またもとへもどってくることも、向きをかえることもないならば、すべてのものはしまいには同じ形をもち、同じ状態になり、生成を止めてしまうだろう」とソクラテスは説明している。

⁹⁷ 前掲書『パイドーン』72D (137 ページ1から5行目) において、「生あるものがすべて死んでいって、いったん死ぬと、死者のその状態にとどまり、ふたたび生きかえることがないならば、しまいには必ずや、すべてのものが死に絶えて、生きているものは何一つ無くなってしまわないではないか。なぜなら生あるものが死者以外のものから生れ、他方生あるものが次々と死んでゆくとしたら、万物が消耗されつくし、死滅してしまうのを避ける、どんな手段があるだろう」と説明している。

⁹⁸ 前掲書『パイドーン』72D から E (137 ページ9から10行目)。

⁹⁹ 前掲書『パイドーン』75D (144 ページ11から14行目)。

¹⁰⁰ 前掲書『パイドーン』75D (144 ページ17から18行目)。

ものとはおなじではないこと、あるいは異なっていることに気づく。もし想起によって、知覚したものが何であるかを知るとするならば、人間はあの世に棲んでいるときに既にそのものについて知識を持っていたことになる。ソクラテスは、「魂は、人間の形をとって肉体に宿る以前に肉体から離れて、しかも知力をもって存在していた」¹⁰¹と力説する。

人間の何についての知識を持っていたのであろうか、そしてそれを想起しうるのであろうか。何かの知識を想起するということは、感覚で捉える前に、その知識を持っていたことになる。すなわち、その知識を生まれる前に得ていたことになる。ソクラテスは「われわれは見たり聞いたり、そのほかの仕方で感覚し始めるまえに、等しさそのものが何であるかの知識を得てしまっていたのでなかればならない」¹⁰²と言う。すなわち、等しさの「感覚よりも先に、等しさの知識を得てしまっていたのでなければならぬ」¹⁰³とソクラテスは主張している。ソクラテスは、「美とか、善とか、すべてそのような実在が存在するならば、そしてわれわれが、それらがまえから存在し、われわれのものであったことを発見し、感覚される事物をすべてこの真実在と関係させ、それと比較してみるならば、それらの真実在が存在すると同じように必然的に、われわれの魂も、われわれが生れるまえに存在していたことになる」¹⁰⁴と説明する。ソクラテスは、魂が存在するには条件が必要であるとしている。その条件とは、真実在（実在）が存在していることである。もし真実在が存在しないならば、魂が生まれる前には存在してはいなかったことになる。たとえば、美とか、善とかが確実に魂が生まれる前に存在していたならば、美とか善とかいう実在がかつて自分自身のものであったことを再発見される時、感覚される事物をすべてその実在（真実在）と関係させ、それとの類似を確かめることによって、美とか善とかが実在するとソクラテス（すなわちプラトン）は説明している。

ソクラテスと二人のピタゴラス派の青年は、実在（真実在）が存在することには疑問がなく、それは存在すると仮定できると同意している。もし真実在が存在し、魂が真実在の知識をもっているならば、この世にて、たとえば、石を見るとき、それが石であると知り得るのは、石についての知識を持って生き返っているからである。このように想起によって真実在から、この世において知覚する事物についての知識を得るのは、蘇るとき魂が知識をもって生まれるからである。そして魂は生きていることになる。魂は肉体が朽ちても死に枯れないと考えられる。

¹⁰¹ 前掲書『パイドン』76D（146ページ14から15行目）。

¹⁰² 前掲書『パイドン』75B（143ページ8から9行目）。

¹⁰³ 前掲書『パイドン』75B（143ページ16行目）。

¹⁰⁴ 前掲書『パイドン』76E（147ページ5から8行目）。

2.5 魂の不滅性への疑問を廻る説明

二人のピタゴラス派の青年の疑問は、「人間の死と同時に魂は分散し、それが魂にとっての最後となるのではないか」¹⁰⁵あるいは「魂が肉体から離れると、本当に風がそれを吹きとばし、散りぢり」¹⁰⁶にするのではないかという疑問であった。この疑義に対してソクラテスは、魂の特性を盾にして答えている。魂は、非合成物であり、不可視的なものであるという特性を盾にソクラテスは返答している。ソクラテスは、「魂という、この目には見えないもの、自分にふさわしい、高貴で、清浄で不可視的な世界、文字どおりハーデースの（見えざる）国へ、善良で賢明な神のもとへおもむくもの」¹⁰⁷として説明し、「このようなわれわれの魂、このように生れついている魂が、はたして多くの人々の言うように、肉体からはなれるとたちまち、吹きとばされ、滅びてしまうであろうか。そんなことは絶対はない」¹⁰⁸と語気を強めて説いている。ソクラテスは、魂が肉体的なものとの一切の接触を断つこと¹⁰⁹によって、魂は「自分に似た不可視的なもの、神的で不死で叡知的なものの世界へと去ってゆき、そこに至ると、放浪、愚かさ、恐れ、激しい慾情、そのほかもろもろの人間の悪から解放され、幸福を得るのではないか」¹¹⁰と考えている。そして「真に神々と共に生きるのではなかろうか」¹¹¹と言う。清浄された状態にある魂は、神的な世界に至り、そこに棲むのであって、決して消滅することはないのであると、ソクラテスは言っている。

それでは、汚れた浄められない魂はどうなるのであろうか。この場合には、「魂は常に肉体と共にあり、その世話をし、それを愛して、肉体とその欲望や快樂にまどわされ、その結果、肉体的なものだけが、つまり人が触れたり見たり、飲んだり、食べたり、性の満足のためにつかたりするものだけが、真実のものであると考え、肉眼にはかくされている不可視的なもの、叡知的であり、哲学によってとらえられるものを厭い、避けるように慣らされてきたためである」¹¹²と説明する。可視的なものは、魂にとっては、重荷であると考えられる。このような魂は、「重荷をおわされ、目に見えないものとハーデースの国とを恐れて、ふたたび可視的な世界へひきもどされ、よく言われるように、石碑や墓のまわりをうろつくのだ。それらのまわりには、影のように魂のまぼろしが見られるという」¹¹³と説き、「浄められない

¹⁰⁵ 前掲書『パイドーン』77B (148 ページ9 から10 行目)。

¹⁰⁶ 前掲書『パイドーン』77D (149 ページ7 から8 行目)。

¹⁰⁷ 前掲書『パイドーン』80D (156 ページ2 から3 行目)。

¹⁰⁸ 前掲書『パイドーン』80D からE (156 ページ4 から6 行目)。

¹⁰⁹ ソクラテスは、魂が一切肉体的なものとの接触を断つ状態を清浄な状態と呼んでいる。

¹¹⁰ 前掲書『パイドーン』81A (156 ページ15 から17 行目)。

¹¹¹ 前掲書『パイドーン』81A (156 ページ18 行目)。

¹¹² 前掲書『パイドーン』81B (157 ページ3 から8 行目)。

¹¹³ 前掲書『パイドーン』81C (157 ページ15 から158 ページ1 行目)。

ままで肉体から離れ、依然として可視的なものにかかずらわっている魂が投ずるまほろし¹¹⁴であるとソクラテスは言う。汚れた魂は、石碑や墓などの周りをうろつき、「自分につきまとうもの、肉体的なものの欲望のために、ふたたび肉体の中に縛られるまで、さまよいつづける」¹¹⁵と説く。汚れた魂は、たとえば「大食いで、不節制で、大酒飲みで、といった生活に慣れて自制しなかった人々は、おそろくろばとか、そういった類いの動物になる」¹¹⁶と語る。「不正や専制や貪欲^{どんよく}を好んだものたちは、^{おおかみ}狼や^{たか}鷹や^{とび}鷹の類いになるであろう」¹¹⁷と語る。汚れた魂の人達の中で「いちばんよいところに行けるのは、通俗的な市民道徳に励んだ人々でないか。それは普通節制とか正義とかよんでいる、哲学や知性を欠いた、慣習や訓練から生じる道徳のことだ」¹¹⁸と語る。しかし、「神々の種族へは、哲学を学んで、全く浄らかなさまで世を去った者以外は、入ることをゆるされない」¹¹⁹と説く。

プラトンは、ソクラテスの言葉（語り）を通して、魂の肉体からの解放・浄化が哲学によって達成されることを説いている。そのためには、哲学する人の魂は「快樂や欲望や苦痛からできるかぎり離れる」¹²⁰ことをプラトンは勧めている。「人が快樂や恐怖や欲望を強く感じるとき、その結果として受けとる悪は、普通考えられるような、たとえば病気をするとか、欲望をみだすために資産をつかいはたすとかの類いのことではなくて、諸悪の中でも最大にして最後のもの」¹²¹に至り、快樂や欲望などの肉体的感覚に膠着すると、「魂が肉体と同じことを考え、同じものを喜ぶならば、魂は思うに必然的に肉体と同じ習慣、同じ糧を持つようになって、決して清浄な状態で、ハーデースに至ることができず、常に肉体によって汚されたままで世を去り、そうしてすぐにまたほかの肉体に入り」¹²²、その結果は「神的で清浄で単一な形を持つものとの共存を永久に奪われる」¹²³と説いている。

2.6 魂の不滅性あるいは不死性への疑問に対する反論

二人のピタゴラス派の青年の反論は、次の二つの仮説として示される。すなわち、第3の1の仮説は、魂は調和である、ならびに第3の2の仮説は、魂には寿命がある。

¹¹⁴ 前掲書『パイドン』81D（158ページ1から2行目）。

¹¹⁵ 前掲書『パイドン』81E（158ページ7から8行目）。

¹¹⁶ 前掲書『パイドン』81Eから82A（158ページ11から12行目）。

¹¹⁷ 前掲書『パイドン』82A（158ページ15から16行目）。

¹¹⁸ 前掲書『パイドン』82B（159ページ3から5行目）。

¹¹⁹ 前掲書『パイドン』82C（159ページ11から12行目）。

¹²⁰ 前掲書『パイドン』83B（161ページ7行目）。

¹²¹ 前掲書『パイドン』83B（161ページ8から10行目）。ここで最大にして最後のものとは、人間が感覚を強く与える対象こそが最も明瞭で最も真実であると考えことを含意している。

¹²² 前掲書『パイドン』83D（162ページ3から5行目）。

¹²³ 前掲書『パイドン』83D（162ページ6から7行目）。

この第3の1の仮説は、シミアスのソクラテスに向けられた反論である。第3の2の仮説は、ケベスのソクラテスに向けられた仮説である。シミアスは、調和として琴の調和を持ち出している。調和は、非可視的で非物質的なものであるが、シミアスは、その調和が「美しく神的なもの」¹²⁴であると見ていた。この調和を産み出している琴自身や弦は、可視的な物質であって合成物であり、「土の性質を持ち、死すべきものと同種」¹²⁵である。シミアスの立てた仮説は、

『肉体と同種の琴をこわしたり弦を切ってしまうとしよう。このとき、琴自身やばらばらにされた弦は存在するが、調和は消え、死滅する。このとき、死すべきものとしての琴や弦は存在し、神的な調和が琴や弦より先に滅びている。このとき、死すべきものが残り、神的（不死）なものが先に滅びるのは、ソクラテスの仮説に反する』

であった。このシミアスの仮説では、調和が魂であると疑似・類似させ、琴や弦は存在するが、調和は消えている。ソクラテスの仮説では、琴や弦（つまり肉体）が減んでも、調和（すなわち魂）が存在する、ことになるはずである。シミアスとソクラテスの仮説のいずれが正しいのであろうか。ここでは、プラトンの論理展開に従って、ソクラテスの仮説の正当性を示しておこう。

シミアスとソクラテスの条件設定の違いは、魂にある。ソクラテスは魂を非可視的な非合成物であると設定しているが、シミアスは調和（すなわち魂）を非可視的な合成物とし、肉体を琴自身や弦としている。両者の肉体についての想定は同じである。この両者の違いが両者の仮説の違いをもたらしている。ソクラテスはこの点を見逃さずに展開している。ソクラテスは、「調和とは合成されたものであり、魂とは緊張関係にある、肉体の構成要素から成る一種の調和だという、この考えを捨てないならば」¹²⁶と説明する。シミアスの説明では、合成される調和が「これを合成するはずの要素より先に存在していた」¹²⁷ことになるので、ソクラテスとしてはこの仕方を認めることはできない。このシミアスの説明の仕方は矛盾しているとソクラテスは指摘する。魂が人間の肉体が形成される前に存在したことを認めながら、一方では、「魂が合成されたもの」¹²⁸と言っている所に矛盾点があるとソクラテスは指摘する。ソクラテスにとって、「魂が肉体の中に入るまえに存在していたということは、あの『ものそのもの』という名でよばれる真実在が存在するのと同じように確実なこと」¹²⁹であった。

¹²⁴ 前掲書『パイドーン』86A（166ページ8行目）。

¹²⁵ 前掲書『パイドーン』86A（166ページ9行目）。

¹²⁶ 前掲書『パイドーン』92A（178ページ6から7行目）。

¹²⁷ 前掲書『パイドーン』92B（178ページ8行目）。

¹²⁸ 前掲書『パイドーン』92B（178ページ12から13行目）。

¹²⁹ 前掲書『パイドーン』92D（179ページ13から14行目）。

このことから、魂が調和であり、これが琴や弦などよりさきに滅びるという見解は受け入れられないとソクラテスは言う。というのは、合成物である調和が消滅するときに、その要素である琴や弦が存在することができるであろうか。調和しているのであるから、琴と弦とが適切な程度で調和を組成しているはずである。調和が消えるときに、琴や弦が残ることはあり得ない。よって、このことは、調和が魂であり合成物であるというシミアスの仮説は矛盾している。もし調和が存在するならば、琴や弦も存在する。ゆえに、第3の1の仮説は成立しない。

次には、第3の2の仮説について検討して見よう。ケベスの仮説は、魂は長寿ではあるが、いつかは死ぬというものであった。魂が人間の生まれる前に存在することについては合意されたが、このことは魂が不死であることを意味しはしない。魂が不死であるかどうかは検討される必要があった。最初に、ケベスの仮説の意味を述べておこう。魂が人間の肉体には入ると、魂は確かに朽ちる肉体と共に消滅する運命を背負うことになる。魂が不死でないならば、肉体の死と共に、滅びることになる。この場合には、魂が不死であることが証明されていないならば、人が死を恐れるのも当然かも知れない。

2.7 魂の不死性・不滅性

魂が不死であることを証明するためには、幾つかの前提が必要になる。ソクラテスが設けている前提として「純粋な美そのもの、善そのもの、大そのもの、そのほかすべてそのようなものがあるという前提」¹³⁰が措かれた。この前提は、たとえば、美そのものが美の原因であることを含意する前提である。ソクラテスは、「ものを美しくしているのは、ほかでもない、かの美の臨在というか、共存というか、そのほかその関係はどのようなものでもあってもかまわない」¹³¹と説き、「すべて美しいものは美によって美しいということ」¹³²であると説明している。この前提は、魂そのものは存在することを示している。純粋な魂そのものが存在する。

ソクラテスのもう一つの前提は、「形相そのものが永久に自分自身の名でよばれるだけでなく、形相そのものではないが、存在するかぎり常に形相の性質を分けもつ事物も、また同じ名でよばれる資格がある」¹³³である。ソクラテスは、奇数を取り挙げて、この前提の意味を説明している。奇数は、奇数とという形相（性質）を常にもつ。それだけでなく、例えば、3は奇数そのものではないが、奇数という性質を持つので、3は奇数である¹³⁴と言われる。

¹³⁰ 前掲書『パイドン』100B（194ページ18から195ページ1行目）。

¹³¹ 前掲書『パイドン』100D（195ページ14から16行目）。

¹³² 前掲書『パイドン』100D（195ページ16から17行目）。

¹³³ 前掲書『パイドン』103E（202ページ16から18行目）。

この前提から次のことが導き出される。「相反する性質の一方は決して自分と反対の性質になろうとはしない」¹³⁵ということが引き出される。たとえば、3は奇数であり、決して反対の性質の偶数には成らない。同様に、3は決して偶数になることはなく、常に奇数という性質(形相)に止まる。よって、3は非偶数である。ソクラテスは、「相反する性質がたがいに相手を受け入れないだけでなく、相反する性質をもつ事物の一方が近づく場合にも、自分の持つ性質と反対の性質は決して受け入れない」¹³⁶と説明している。

ソクラテスは、第一の前提と第二の前提において、魂の不死性を証明している。第一の前提によって、魂や生命や死などは存在する。第二の前提によって、生命と死とは相反する形相である。よって、生命は不死を意味する。この性質を使うと、魂が生命をもたらし、かつ、魂は死を受け入れないという性質、すなわち生命そのものは死とは反対の性質があるために、魂は不死であるといえる。

次に、二人のピタゴラス派の青年の疑問に答えたソクラテスは、魂の不死性・不滅を立証へと進める。それを仮説として表現するならば、

第4の仮説は、イデア説による魂の不死性、となる。この仮説は、純粋な美そのもの、善そのもの、大そのもの、そのほかすべてそのようなものがあるという前提ならびに形相そのものが永久にその形相の性質を持ち続けることを意味する。また形相そのものではないが、形相の持つ性質を分け持つ事物も同じ名で呼ばれるという前提のもとで、魂は不死であると、表現される。この仮説では、肉体が生命を持つのは、肉体に魂が生じるからである。その魂に生命をもたらし、生命の反対である死とは相反する性質であるので、魂は不死であるとなる。魂が死を受け入れないのは、まさに「3が偶数にならず、まして奇数そのものが偶数になったりせず、また火が冷たくならず、まして火の中にある熱が冷たくなったりすることもないというように」¹³⁷とソクラテスは説明している。

それでは、魂の不滅性はどのように説明されるのであろうか。魂が永遠であり不死であるとき、そのものが破壊・破滅を受けることはないであろうからである。不死なるものが不滅であれば、「魂が不死であれば、それはまた不滅でもある」¹³⁸とソクラテスは語る。ソクラテスは、「神や、生命の原理そのものや、そのほか何か不死なるものがあるとしたら、それらが

¹³⁴ 数字3について、ここでの前提についての説明は前掲書『パイドーン』103Eから104AからB(203ページ1から14行目)参照。

¹³⁵ 前掲書『パイドーン』103C(201ページ15行目)。

¹³⁶ 前掲書『パイドーン』105A(206ページ2から4行目)。

¹³⁷ 前掲書『パイドーン』106B(209ページ6から7行目)。

¹³⁸ 前掲書『パイドーン』106D(210ページ9から10行目)。

決して破滅しないということは、すべての人の同意するところであろう¹³⁹という。

2.8 魂の不死性と魂の多様性

魂が不死であることから、魂が悪から逃れるためには、賢い魂になることが望まれる。ソクラテスは、「魂がハーデースへ行くにあたって持ってゆくものは、ただ教育と教養だけであって、これらのものこそ、死者にとってあの世への旅の門出からただちに、最大の利益ともなるし災いともなると言い伝えられている¹⁴⁰と語る。魂の糧は、教育と教養であるとソクラテスは考えているのであろうか。「各人が死ぬと、生きているうちからその運命をつかさどってきたそれぞれのダイモーンが、道案内をしてあるところへつれてゆくが、そこに集まった人々は裁判を受けて、それから彼らをこの世からあの世へとつれてゆく役をあたえられている、あの案内人と一緒に、ハーデースへおもむかなければならない¹⁴¹と語る。ハーデースへの案内人は鬼神（ダイモーン）という仲介者（神々と人間の間の仲介者）である。さらに、「彼らが、ハーデースで定められた運命を受け、必要な期間だけそこにとどまると、別の案内人が彼らをふたたびこの世へつれもどすのだ、長い数多くの周期をくりかえしたあとで¹⁴²と語っている。別の案内人と在るがいかなる案内人なのであろうか。

魂の冥府での旅は十人（魂）十色である。例えば節度ある賢明な魂は、「すすんで導きに従い、そこで出遭うものも、このような魂にとっては未知のものではない¹⁴³。「清らかに節度ある生活を送った魂は、神々がその道ずれとなり、案内者となってくれて、それぞれ自分にふさわしい場所に住むことになる¹⁴⁴。汚れのない魂の案内人は神々しい案内人である。他方、肉体に執着する魂のほうは、「肉体と可視的世界のまわりを長いあいだうろつき、大いに反抗し、大いに苦しんだあとで、やっとう無理やりに、定められたダイモーンに導かれて去ってゆく¹⁴⁵と語る。この肉体に執着する魂たちの案内人はダイモーンである。罪を犯した、あるいはその類いの魂の冥府での案内人は誰なのであろうか。ソクラテスは「不浄な魂、何か汚れたことをした魂、たとえば不正の血を流したとか、そのほかそのような、それと同じ類いの魂の仕業である、同じ類いの罪を犯した魂は、ほかの魂がみんな避け、忌み嫌って、誰も道ずれにも案内人にもなろうとしてもくれないので、たった一人で、途方にくれながら、一定の時間が過ぎるまでさまよい歩かなければならない。そしてその時がくると、そういう魂

¹³⁹ 前掲書『パイドン』106D（210 ページ4 から6 行目）。

¹⁴⁰ 前掲書『パイドン』107D（212 ページ6 から8 行目）。

¹⁴¹ 前掲書『パイドン』107D から E（212 ページ9 から12 行目）。

¹⁴² 前掲書『パイドン』107D（212 ページ12 から14 行目）。

¹⁴³ 前掲書『パイドン』108A（213 ページ2 から3 行目）。

¹⁴⁴ 前掲書『パイドン』108C（213 ページ11 から12 行目）。

¹⁴⁵ 前掲書『パイドン』108A から B（213 ページ3 から5 行目）。

にふさわしい住家へ無理につれてゆかれる」¹⁴⁶と語る。罪人の魂には案内人は存在しない。

第3節 不死の魂の住み家

3.1 裁かれる魂

この世での行為によって、魂は裁かれるとプラトンは考えている。『ゴルギアス』において、ゼウスとの掟によって、魂が裁かれることが語られている。たとえば、「人間たちの中でその一生を正しく、また敬虔に過した者は、死後は「幸福者の島」に移り住み、そこにおいて、災厄から離れた、全き幸福のうちに日を送ることになる」¹⁴⁷が、これに反して、「不正に、神々をないがしろにする一生を送った者は、償いと裁きの牢獄—それはつまり「タルタロス（奈落）」と呼ばれているところだが—そこへ行かねばならぬ」¹⁴⁸とある。幸福者の島に移り住む者となるか、あるいは奈落到落ちるかは裁判官による判決によって決められる。裁きは魂を観察することによって為される。たとえば、魂には何一つ健全なところがなく、「偽誓や不正のために、その魂はいたるところ鞭でひっぱたかれていて、その傷跡でいっぱいになっているのを見てとる」¹⁴⁹こともある、つまり、「その傷跡というのは、その人の生前における行為の一つ一つが、彼の魂の上に刻み込んだところのものなのである。また、その魂は、嘘と法螺のために全体がひん曲っており、そして真実を無視して育てられたために、真直ぐなところは一つもないのを見てとる」¹⁵⁰のである。また、「何でも思いのままにできる自由と、贅沢と、傲慢さと、そして行為に抑制がきかなかったこととによって、その魂は釣り合いを失い、醜くなっているのを見る」¹⁵¹こともある。裁き者は「その魂を見下げるようにして、真直ぐに牢獄の方へ送るのである。そして、その魂のほうは、そこへ着いたなら、それ相当の責苦を受けるはずである」¹⁵²とソクラテスは語った。

時には、「神を敬い、真理を友として一生を送った魂を見ることもある」¹⁵³。そのような魂は「生涯、自己のなすべきことをなして余計なことに手出しをしなかった、哲学者の魂なのであるが、そんな魂を見ると、彼は感心に思って、「幸福者の島」へと送るのである」¹⁵⁴とソクラテスは語られている。

¹⁴⁶ 前掲書『ハイドーン』108BからC (213ページ6から10行目)。

¹⁴⁷ プラトン著 (加来彰俊訳)『ゴルギアス』523AからB (236ページ1から3行目)。

¹⁴⁸ 上掲書『ゴルギアス』523AからB (236ページ3から5行目)。

¹⁴⁹ 上掲書『ゴルギアス』524E (240ページ1から2行目)。

¹⁵⁰ 上掲書『ゴルギアス』525A (240ページ3から5行目)。

¹⁵¹ 上掲書『ゴルギアス』525A (240ページ6から7行目)。

¹⁵² 上掲書『ゴルギアス』525A (240ページ8から10行目)。

¹⁵³ 上掲書『ゴルギアス』526C (243ページ5から6行目)。

¹⁵⁴ 上掲書『ゴルギアス』526C (243ページ7から9行目)。

3.2 宇宙と大地の形

大地は球状で、宇宙の中心に位置し、静止している¹⁵⁵。大地は、どの方向にも一様で、傾いていない。宇宙そのものがすべての方向に均質である。宇宙は、星について語る人々によって、アイテールと呼ばれる¹⁵⁶。次に、大地の表面について説明しよう。大地は汚れがなく、汚れない宇宙の中心に位置し、そこには星がある。大地には様々な形も大きさもことなる窪みが多数¹⁵⁷あり、その窪みの中に水や空気や霧が流れ込んでくる¹⁵⁸。これらの水や空気などは宇宙の沈殿物である。この宇宙がアイテールと名付けられている。

人間はこの窪みに住んでいる。「大地の窪みの一つに住んでいながら大地の上に住んでいるものと思いきみ、空気を天とよんでいる、まるで空気が天であって、その中を星が運行しているかのうに」¹⁵⁹とソクラテスは語る。人間は空気の果てる所までいったことがないが、誰かがその果てまでに達するか、あるいは「翼を得て舞い上がることができたら」¹⁶⁰、世界の事物を眺め、そして、人間の構造が天を見るに堪えうるならば、「真の天」、真の光」ならび

¹⁵⁵ プラトンは、地球（人間が住む大地）が世界の中心にあり、静止していることを確信している。

¹⁵⁶ プラトンが、地球についてどのような観念を抱いていたのか不明である。プラトンは大地が球形であるといっていることから判断するに、球形の大地（地球）を概念として抱いていたのは有り得る。また、球形の大地が宇宙の中心にあり、星（惑星）は天にあり、大地の周囲にあると考えているようである（地球中心説あるいは今日の用語では天動説に類似した宇宙観をもっていたと思われる）。プラトンは、宇宙は、「神の先々への配慮によって、事実、魂を備え理性を備えた生きものとして生まれたのである」と言っている（プラトン著（山種恭子訳）『ティマイオス』30B（32ページ15行目））。プラトンは、宇宙の造り主は、何に似せて宇宙を作ったのかと問い、神が自分自身に似ている、一個の可視的な生き物として構築したと回答している（上掲書『ティマイオス』30から31A（33ページ2から34ページ4行目）参照）。

『聖書』の『ヨブ記』第38章31節から33節（744ページ3から9行目）に、ヨブに答えて「あなたはプレアデスの鎖を結ぶことができるか。オリオンの綱を解くことができるか。あなたは十二宮をその時にしたがって引き出すことができるか。北斗とその子星を導くことができるか。あなたは天の法則を知っているか、そのおきてを地に施すことができるか」とたたみつけている。またヘーシオドスの『仕事と日』（農耕暦）（57ページ2から6行目）に、「アトラスの^{ひめみこ}姫御子、プレアデス^{きぼる}（昴星）の昇る頃に刈り入れ、その沈む頃に^{こうん}耕耘を始めよ。この星は四十夜、四十日の間姿を隠し、一年の^{めぐ}廻るがままに、やがて鎌を^と研ぎにかかる頃、ふたたびその姿を現わす」とある。また、その（後悔について）（同書82ページ8から10行目）には、「昴星がオーリーオンの妻まじい力を避けて、霧たちこめる海に沈む季節には、あらゆる風が吹き荒れる」とある。プレアデス星団〔昴星〕やオリオン座に関する知識は、ヨブやギリシヤの農耕民には、是非必要であった。その知識を支配するのが神〔あるいはゼウス神〕であった。中世では、神が星をうみだし、その運行を支配すると信じられていた（あるいは信仰されていた）。この神の業は、近代の星に関する多くの報告（ガリレオなどの）によって、地球が中心ではなく、静止していないことが明らかにされる。このことは、今日では、プラトンの『パイドン』ならびに『ティマイオス』で繰り返りひろげられるイデア説にもとづく宇宙観は、神話の世界での語りと理解されるのかもしれない。

¹⁵⁷ 大地の表面を取り巻いている窪みには、入り口が広く深い窪みや深い入り口が狭い窪みや入り口が広いが浅い窪みがあった（前掲書『パイドン』111C（218ページ9から12行目）参照）。

¹⁵⁸ 前掲書『パイドン』109B（214ページ18から215ページ1行目）参照。

¹⁵⁹ 前掲書『パイドン』109D（215ページ11から13行目）。

¹⁶⁰ 前掲書『パイドン』109E（215ページ15行目）。

に「真の大地」があることを知る¹⁶¹。人間は、天、光、大地の影をみて、それが真実在であると思っていると、ソクラテス（あるいはプラトン）は言いたいのであろう。あたかも洞窟の中の囚人たちが壁に映る影を真実在であると思ったように。

ソクラテス（あるいはプラトン）は、天上の世界があり、地上の世界とは違い、地上の世界より「はるかにずっとすぐれている」¹⁶²とみている。地上の世界は、天上界の影であり、天上界に似せて作られているとプラトンと考えている¹⁶³。

3.3 翼をつけた旅人のみた大地：真の大地

この旅人がみた大地は、真の大地である。大地は、「十二枚の革から作った鞆^{かわ}のように見え、それぞれの部分は違った色に分けられている」¹⁶⁴として語られた。真の大地では、大地全体がそのような彩りを持っていた。ある部分は美しい赤紫、ある部分は金色、白い部分は白亜や雪よりも白い、その他にも様々な色の大地があった。「大地の窪みそのものでさえ、水と空気がみちているため、ほかのさまざまな色の中にあたってきらきらと輝き、一種の色調を呈しており、その結果は大地が全体として一つの連続した多彩な色模様のように見える」¹⁶⁵と語る。真の大地の色はこの世界で珍重される宝石（紅玉、碧玉や緑玉など）で彩られている。「真の大地は、これらすべての宝石類だけでなく、金、銀、その他、そのようなものによっても飾られている」¹⁶⁶と語る。

大地には、人間の他に多くの動物も住んでいる。あるものは内陸に住み、あるものは海辺に住み、あるものは大陸に近い島に住んでいる。これらの人間や動物たちは空気の傍らに住んでいる。この世界に住んでいる人達は、病気に罹ることはなく、長生きする。「視覚、聴覚、知力その他、すべてのそのような能力において、彼らはわれわれよりまさっている、空気が水より、またアイテールが空気より、その清浄さにおいてまさっているのと同程度に」¹⁶⁷とかの世界を讃美する。

旅人がみた大地、つまり世界は、神の世界であった。その大地には、神々の杜^{もり}や社があり、そこには神々が住んでいて、神託や予言も、神々の姿を拝むことが出来る。神々の間での交

¹⁶¹ 前掲書『パイドーン』109E（215ページ17から18行目）参照。

¹⁶² 前掲書『パイドーン』110A（216ページ6行目）。

¹⁶³ プラトンは、球形の大地（地球）自体も天の世界に似せて作られているとしているが、これはイデア説（イデア論）を宇宙観に発展させるものである。プラトンの『ティマイオス』においてさらに論理展開される宇宙観である。

¹⁶⁴ 前掲書『パイドーン』110B（216ページ11から12行目）。

¹⁶⁵ 前掲書『パイドーン』110CからD（216ページ18から217ページ2行目）。

¹⁶⁶ 前掲書『パイドーン』110Eから111A（217ページ11から12行目）。

¹⁶⁷ 前掲書『パイドーン』111B（218ページ2から4行目）。

わりが直接行われる。神々は「太陽や月や星を、そのあるがままの姿において見、そのほか、これにともなう幸福をも享受する」¹⁶⁸とソクラテスは語る。

3.4 大地の内部構造

大地の表面を蔽っている多数の窪みは、「地下の通路によって、たがいに連絡しており、それを通して沢山の水が」、「熱湯や冷水がたえず流れる巨大な地下の河をなし、あるいはまた、沢山の火が流れる大きな火の河をなし、さらには、どろどろした泥の流れる多くの河」¹⁶⁹をなすと語る。大地の振動によって、泥流が流れ、溶岩が噴きだし流れるが、大地の「割れ目へすべての流れは流れこみ、またそこから流れ出てゆく」¹⁷⁰と語る。その割れ目の中でも大きなものは、「大地全体を端から端まで貫いている」¹⁷¹が、それはタルタロス（奈落）¹⁷²と呼ばれた。

水や火や泥流ならびに溶岩流などのすべては、「タルタロスから出てタルタロスへ流れこむ」¹⁷³が、それは、「流動体にはそれをささえる底がない」¹⁷⁴からである。流動体は、震動し、波のようにもり上がり、退いている。空気あるいは息が、「流動体と一緒に震動し、出入りにあたって、恐ろしいとてつもない風を起す」¹⁷⁵と語る。

「満たされた水は、地中の水路を流れ、それぞれの水路が通じている場所に達すると、そこに海や湖や河や泉をつくる。そしてそこからふたたび地下にもぐり、あるものは多くの広い地域を経めぐり、あるものはそれに比べてわずかな狭い地域を通過して、もう一度タルタロスに流れこむ」¹⁷⁶と語る。多方面に流れ出て、そしてタルタロスに流れてくるが、あるものは「すべて流れ出た場所よりも下方へ流れこむ」¹⁷⁷。またあるものは「完全にぐりと大地をと

¹⁶⁸ 前掲書『パイドン』111B（218ページ8から9行目）。

¹⁶⁹ 前掲書『パイドン』111D（218ページ13から16行目）。プラトンは、シチリアの火山活動によって泥流が流れ、次に溶岩が流れる現象を連想しているのかも知れない。

¹⁷⁰ 前掲書『パイドン』112A（219ページ7から8行目）。

¹⁷¹ 前掲書『パイドン』112A（219ページ4行目）。

¹⁷² ヘシオドス著（廣川洋一訳）『神統記』120（22ページ4行目）には、「路広の大地の奥底にある暖々たるタルタロス」とある。タルタロスは、世界の始まりから、存在していた。また同書（720から729（92ページ1から12行目））において、「大地から暖々たるタルタロスまではそれほど遠く隔てっているのだ」とある。大地から暖々たる大地までは、青銅の鉱床が天から9日9夜もおちつづけると同じほどの隔りがある。その同書725（92ページ9から10行目）には、「青銅の鉱床は、大地から九日九夜も落ちつづけて十日目によくタルタロスにとどくであろうからである」とある。

タルタロスは、カオス、ガイア、エロス、と共に生まれた原初の神である。

¹⁷³ 前掲書『パイドン』112B（219ページ10行目）。

¹⁷⁴ 前掲書『パイドン』112B（219ページ10から11行目）。

¹⁷⁵ 前掲書『パイドン』112B（219ページ15行目）。

¹⁷⁶ 前掲書『パイドン』112CからD（219ページ18から220ページ3行目）。

りまいてひとまわりするか、また蛇のように幾重にもぐるぐると巻いて、できるだけ下までさがって、ふたたび流れこむ¹⁷⁸と語る。

ソクラテスは4つの流れを取り上げている。ひとつは、外側を廻っている流れであるが、それをオーケアノス¹⁷⁹(大洋)と呼んでいる。これと反対側(タルタロスからの出口とは反対側)を流れるのをアケローンと呼んでいる。これは、「地中を流れてアケルーシアスの湖に達する。そこには多くの死んだ人々の魂がやってきて、あるいは長くあるいは短く、定められた期間のあいだとどまってから、ふたたび動物に生れかわるべく送り出される」¹⁸⁰と語る。

第三の河は、二つの河の間から発し、火が燃えさかる広い場所に流れこみ、熱湯と泥が煮えたぎる湖を作る。その後、この河は泥流となって回流し、地中をあちらこちら経めぐって、アケルーシアスの湖のほとりに達するが、その水とは混りあわない。そして、「何度も地中をめぐって、もっと下方でタルタロスへ流れこむ。この河がピュリプゲトーン(火の河)とよばれるものであり、その溶岩流が地表のそこそこに断片を噴き出している」¹⁸¹と語る。

第四の河は、第三の河の反対側から流れ出ている。この河は、最初、荒涼とした場所で、藍色のスキュギオスク(恐怖の地)と呼ばれる所に流れこいで作った湖は、ステュクス湖(恐怖の湖)と呼ばれる。河はこの水によって力を得て、地下に潜り、ピュリブレゲトーン(火の河)と反対の方向にまわって、反対側からアケルーシアスの湖に達する。そして、この河の水も何ものとも混じり合うことなく、ピュリプゲトーンと反対側からタルタロスへ流れ込む。詩人達はこの河をコーキュートス(嘆きの河)と言う。

3.5 魂の住み家

始めすべての魂の裁きがある。その次に、普通に生きた人々の魂は、アケローンに行き、そこで舟に乗りアケルーシアス湖に住み、浄められる、もし犯罪をおこしていれば、その人の罪は許され、善行に対して褒美を受ける。

大きな犯罪を犯したため、矯正しがたい者、また不正不法な殺人を繰り返した者は、彼らにふさわしい運命によって、彼らはタルタロスへ投げこまれ、もう二度とそこから抜け出すことが出来ない。矯正可能であるが重犯罪を犯したと判定される者たちは、タルタロスに墜ちなければならないが、一年間とどまると、波が彼らを投げ出してくれる。普通の殺人者は、

¹⁷⁷ 前掲書『パイドーン』112D (220 ページ 5 行目)。

¹⁷⁸ 前掲書『パイドーン』112D から E (220 ページ 6 から 8 行目)。

¹⁷⁹ ヘロドス著(松平千秋訳)『歴史(中)』第4巻8(11 ページ 14 から 15 行目)に、「このオーケアノスは陽の昇る地点に源を発して全陸地をめぐって流れている、とある。

¹⁸⁰ 前掲書『パイドーン』113A (220 ページ 14 から 16 行目)。

¹⁸¹ 前掲書『パイドーン』113B (221 ページ 2 から 4 行目)。

コーキュートス（悲嘆）の流れへ、父殺しや母殺しはピュリプレゲトーン（燃え盛る炎）の流れに投げ出される¹⁸²。

アケルーシアスの湖のところで、「大声をあげて、あるものは自分が殺した人々の名を、あるものは自分が暴力をふるった相手の名をよび、自分たちがここを出て湖の中に入るのを許してくれ、自分たちを受け入れてくれと嘆願し哀訴する」¹⁸³。このとき、相手を説き伏せることができれば、かれらは流れから出て、その苦しみは終わるが、もし説得できなければ、ふたたびタルタロスへ運ばれ、そこからもう一度河に入れられ、自分が害を加えた人々を説き伏せることができるまで、苦しみを受け続けるのである。特に敬虔に生きたと判定された者たちは、「この地下の場所から解放されて自由になり、高さにある清らかな住家に至って、大地の上に住むようになる」¹⁸⁴と語る。彼らのうちで哲学によって身を浄めた人々は、以後は全く肉体なしに生き、ほかの人々よりもいっそう美しい住家に至る。

ソクラテスは、冥府で報われるためには、「われわれはこの人生において、徳と知恵とにあずかるためにできるだけのことをしなければならぬ」¹⁸⁵とピタゴラス派の二人の青年を戒める。ソクラテスは、「その生涯において肉体にかかわるもろもろの快樂や飾りを、自分とは異質的なもの、むしろ害をなすものとして、それらから離れ、学ぶことの歓びに熱中し、魂を異質的なものによって飾りたてず、魂自身の輝きで、つまり節制、正義、勇気、自由、真実などで飾り、そうして運命の呼び声にこたえてハーデースへ旅立つ日を待つ人は、自分自身の魂について、心を安んじてしかるべき」¹⁸⁶であると結んでいる。

むすびにかえて

本稿では、プラトンの魂の不滅性あるいは不死性を考察し、その証明を簡潔に辿って、プラトンに代表される認識論を検討した。プラトンは、真の實在（本質）は人間の感覚では捉えきれなく、真の實在を知る神と一体化するときに認識できると証明している。真の實在（本質、あるいはそのものの自身、あるいは実相）を認識するために、人は感覚に惑わされないためには、肉体的な感覚から離れ、浄化されることが必要であり、そのためには哲学者を志すことを説いている。

また、プラトンは人の死後（肉体が朽ちること）の世界における魂の活動（活動）について物語を与えている。例えば、彼の対話編『国家』において、エルの物語を紹介し、死後の

¹⁸² 前掲書『パイドン』113Eから114A（221ページ18から222ページ8行目）参照。

¹⁸³ 前掲書『パイドン』114AからB（222ページ9から11行目）。

¹⁸⁴ 前掲書『パイドン』114C（222ページ16から18行目）。

¹⁸⁵ 前掲書『パイドン』114C（223ページ3から4行目）。

¹⁸⁶ 前掲書『パイドン』115E（223ページ13から17行目）。

世界で魂の生活をプラトンは物語っている。冥府から蘇り生き返ってきたエルがあのでの魂の生活について物語することをプラトンは伝えている。あのでは、大地があり、その大地には二つの穴があり、一つは天に向かう穴であり、他は奈落に向かう穴であった。二つの穴の間には裁きをつかさどる裁判官が座っている。彼は、正しい人には天に向かう穴に行くように指示し、不正な人には奈落に向かう穴に行くように命じる。天では魂は幸福に充ちたもてなしをうけ、奈落では恐ろしい扱いを受ける。不正を為した者は、行った悪事に応じて罪業のために刑罰を受け、その執行はそれぞれの罰の10倍になるように、10度繰り返された。他方、善行を為した者、正しく敬虔な者であれば、その割合におうじて報いを与えられた。プラトンは、神々や生みの親に対する不敬や自らの手を下した殺人についてはより大きな報いがあることを語った¹⁸⁷。

プラトンには、宇宙の動きを制御している女神たちがいる。神官から魂は、魂自身の生涯を決める籤を引くのである。その籤が魂の生涯を決まる。籤の総数は、神の意志を伝える神官によって決められているが、その籤のどれを選ぶかは、その魂の自由意志であった。あらゆる種類の魂の生涯の見本が示されたが、「魂そのものの序列は決めるものはなかった。これは、魂はそれぞれの選んだ生涯に応じて、おのずから必然的にそれぞれ異なった性格を決定されるからである」¹⁸⁸ ので、ここに人間にとっての危険にかかわるのである。故に、人は、「善い生と悪い生とを識別し、自分の力の及ぶ範囲でつねにどんな場合でも、より善きほうの生を選ぶだけの能力と知識」¹⁸⁹ を学ばなければならない。魂がより正しくなるような方向へ導く生涯を選択できるような能力と知識とを身に着ける。

プラトンにとっては、善く生きることと幸福な生活（中庸を保つ生活）が生活の目標（あるいは目的）であった。その目的を達成する手段は、徳を実践することであった。そのためには、善き生が貧乏や富や健康や病や名誉などの生活条件とどのような関係にあるかを熟慮し、善き生と悪しき生をもたらず条件を識別し、善き生を選択することが幸福になることをプラトンは説いている。

このプラトンの方法と、経済学において、ある制約条件を満たしながら、消費者が無限期

¹⁸⁷ 前掲書『国家（下）』615C から E（403 ページ 10 から 404 ページ 10 行目）において、プラトンは、独裁僭主アルディアイオス大王（架空の大王である）の罪状を父親殺し、兄殺し、その他多数の不敬な所業を為した男として語っている。その彼の刑罰は、猛々しい男たちが、その大王達を「両側から鷲掴みにして連れ去った」、「その手と足と頭を縛り上げ、投げ倒して皮をはぎ、路に沿って外へ引きずって行き、棘の上で、羊毛を梳くようにその肉を引き裂いた。そして、そこを通り過ぎて行く者たちの皆に、どういふわけで彼らがこんな目にあっているのかということ、彼らがこれからタルタロスへ投げこまれるために連れて行かれる」なるエピソードを語っている。

¹⁸⁸ 前掲書『国家（下）』618B（409 ページ 15 から 410 ページ 1 行目）。

¹⁸⁹ 前掲書『国家（下）』618C（410 ページ 7 から 8 行目）。

間にわたって最適消費径路を選択する方法論と、の間には類似性が見られる。プラトンの時代には、生産を殆ど奴隷に押し付けていたので、生産から解放された市民は、より善き生活を目指すだけで十分であった。今日の市民社会では、生活（生産）条件を満足して、かつ、その上でよりよく生活することが必要であるが、今日の経済学では、生産に関する条件を組み込み、その制約条件を満たし消費者の最適消費径路を選択するのが生活者（生産を含む社会での）の取るべき行為・姿勢であるが、プラトンとの関係で検討すべきことは、今日の経済学における消費者が快適さ（効用）を最大にするように、時々消費水準を選択している点である。プラトンは、必ずしも、善く生きることと快樂（快敵さ）の間には対応関係があるとは信じてはいなくかつ確定していなく、徳ある生活が快樂な生活に優ると述べている。この快（快適）なる生活と徳ある生活の関係については、より精確な検討が求められる。

引用文献

- (1) ヘシオドス著（廣川洋一訳）『神統記』岩波文庫，1984年。
- (2) ヘシオドス著（松平秋平訳）『仕事と日』岩波文庫，1986年。
- (3) ホメロス著（松平千秋訳）『イリアス（上）（下）』岩波文庫，2017年。
- (4) プラトン著（田中美知太郎・池田美恵共訳）『パイドーン』新潮社，1973年。
- (5) プラトン著（藤沢令夫訳）『パイドロス』岩波文庫，1974年。
- (6) プラトン著（三嶋輝夫訳）『アルキビアデス』講談社学術文庫，2017年。
- (7) プラトン著（久保 勉訳）『饗宴』岩波文庫，1971年。
- (8) プラトン著（田中美知太郎・池田美恵共訳）『ソクラテースの弁明』新潮社，1973年。
- (9) プラトン著（藤沢令夫訳）『国家（上）（下）』岩波文庫，2009年。
- (10) プラトン著（加来彰俊訳）『ゴルギアス』岩波文庫，1980年。
- (11) プラトン著（種山恭子訳）『ティマイオス』（プラトン全集12、『ティマイオス』による）岩波書店，1975年。
- (12) デイオゲネス・ラエルティオス著（加来彰俊訳）『ギリシア哲学者列伝（上）』
- (13) 納富信留著『プラトンとの哲学—対話編をよむ—』岩波新書，2015年。
- (14) 日本聖書教会編『聖書』（日本聖書協，1968年）（本稿において、聖書からの引用文はこの『聖書』本からの引用による。）

参考文献

- (1) アダム・スミス著（大内 兵衛・松川 七郎訳）『諸国民の富』（四）（岩波文庫，1992年）
- (2) プラトン著（岩田晴夫訳）『パイドン—魂の不死について—』岩波文庫，2016年。
- (3) プラトン著（藤沢令夫訳）『メノン』岩波文庫，2004年。
- (4) プラトン著（久保 勉訳）『ソクラテースの弁明』岩波文庫，2018年。
- (5) プラトン著（藤原令夫訳）『パイドロス』岩波文庫，2018年。
- (6) プラトン著（三嶋輝夫訳）『ラケス—勇気について—』講談社学術文庫，2017年。
- (7) プラトン著（種山 恭子訳）『ティマイオス』（プラトン全集12、『ティマイオス』）岩波書店，1975年。

- (8) ジョン・ロック著 (加藤 節訳) 『統治二論』, 岩波文庫, 2010年。
- (9) 藤沢令夫著 『プラトンの哲学』 岩波新書, 2017年。
- (10) Michael D. Intriligator, *Mathematical Optimization and Economic Theory*, Prentice-Hall, 1971.
- (11) Morton I. Kamien and Nancy L. Schwartz, *Dynamic Optimization: The Calculus of Variation and Optimal Control in Economics and Management*, North Holland, 1981.
- (12) Paul Madden, *Concavity & Optimization in Microeconomics*, Basil Blackwell, 1986.

(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論)